

第64回

“社会を明るくする運動”

作文・ポスター・標語

第33回

中学生生活体験発表



この作品集は一部共同募金の
配分金を受けて作成しました。

平成26年度

“社会を明るくする運動” 射水推進委員会
射水保護司会

”社会を明るくする運動“とは

”社会を明るくする運動“とは、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。

この運動は、終戦後の荒廃していた社会の中で、住む場所も食べる物もなく街にあふれていた子供たちの将来を危惧した東京・銀座の商店街の有志の方々が行った催し物「銀座フェア」がきっかけとなって始まり、その後、法務省の主唱によって行われるようになりました。

毎年七月を強調月間と定め、全国各地でより多くの住民や団体の理解と参加の下、地域の特色を活かしながら、大人と子供が気楽にふれ合えるような様々な活動が行われています。

犯罪や非行が生まれるのは地域社会であり、また罪を犯した人や非行をした少年が更生を果たす場も地域社会です。よって、その更生を実効あるものにするためには、本人の意思と併せ、本人を取り巻く地域社会の理解と協力が不可欠なのです。

犯罪や非行の防止活動を行うのは、地域に住む人誰もが、それぞれの地位や分野で、もてる力を出し合うことによってできるものなのです。決して特別の人に限られるものではありません。物心両面にわたって”社会を明るくする運動“に参加・協力している人が地域社会にたくさんいらっしゃいます。

地域の安全・幸せは、地域に住む人たちみんなの願いです。責務です。

作文の部

受賞伝達式



ポスターの部

受賞伝達式



受賞伝達式

標語の部



第33回 射水市中学生 生活体験発表大会 受賞伝達式



作品コンテスト優秀作品

(ポスターの部)



射水市立作道小学校
4年 石 黒 月 葉



射水市立大島小学校
5年 原 田 和 芽 奈



射水市立小杉小学校
6年 宮 崎 亜 由 美



射水市立東明小学校
5年 岩 井 希 愛



射水市立作道小学校
5年 栢 万 智



射水市立東明小学校
5年 波 ゆ き 乃



射水市立大島小学校
5年 米 澤 咲 良



射水市立塚原小学校
5年 谷 嵐 千 桜



射水市立歌の森小学校
5年 小 林 空



射水市立新湊小学校
4年 高 木 真 奈 佳



射水市立放生津小学校
6年 渋谷 知 夏

(標語の部)

にげようよ とおりすがりの しらぬこえ	射水市立片口小学校 二年生 丸 池 壺 晟
---------------------------	--------------------------

スマートフォン とってもこわい せいきゆうしよ	射水市立大島小学校 四年生 永 森 陽 彩
-------------------------------	--------------------------

あいさつは 目と目を合わせる きれいな心で	射水市立塚原小学校 五年生 向 山 湧 月
-----------------------------	--------------------------

ありがとう たった五文字で 笑顔咲く	射水市立作道小学校 五年生 林 貫 太 郎
--------------------------	--------------------------

「やめようよ」 言える勇気を みんなの心に	射水市立作道小学校 四年生 京 谷 萌 枝
-----------------------------	--------------------------

あいさつの 山びこがっせん ひびくまち	射水市立新湊小学校 二年生 脇 坂 駿 一
---------------------------	--------------------------

ひとりより みんなであそぶと たのしいね	射水市立片口小学校 二年生 横 井 千 依 子
----------------------------	----------------------------

「やっちゃった」 心にくる 黒いトゲ	射水市立金山小学校 六年生 東 山 新 奈
--------------------------	--------------------------

見て見ぬふり それもりっぱな いじめです	射水市立東明小学校 五年生 丸 田 菜 々 美
----------------------------	----------------------------

万引きは やさしい心も ぬすむんだ	射水市立下村小学校 五年生 山 口 円 香
-------------------------	--------------------------

作品コンテスト表彰式



作品展示会場





第64回 “社会を明るくする運動” 射水市推進委員会 委員長

射水市長

夏野 元志

発刊に寄せて

“社会を明るくする運動”は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、安心して暮らせる地域社会を築こうとする全国的な運動です。

本市におきましても、射水保護司会が中心となって、本運動を積極的に推進しています。毎年、市内の中学生を対象とした「生活体験発表大会」を実施しているほか、小・中学生を対象に、「日常の家庭生活、学校生活の中で、犯罪や非行などに関して、日頃考えていることや体験したこと」をテーマに、作文や標語、ポスターを募り、「作品コンテスト」を行っています。

今年度は、このコンテストに延べ千七百八十六人の応募をいただきました。どの作品も、児童生徒の皆さんの犯罪や非行問題に対する高い関心と、地域のつながり・人を思いやる心の大切さなどについて率直に表現されている素晴らしい作品ばかりでした。

本文集は、中でも特に優秀な作品を収録したものです。この文集を通して、より多くの方々に、非行問題などに対する意識を更に高めていただき、児童生徒の皆さんの日頃考えていることや行動に対して理解を深めていただければと思います。こうした活動を継続して取り組んで行くことが、非行や犯罪のない明るい社会の実現につながるものと思っています。

結びに、本運動にご賛同いただき、作品の取りまとめ等にご尽力賜りました学校関係者並びに保護司各位に厚くお礼を申し上げ、発刊に当たってのごあいさついたします。



射水保護司会 会長 五十嵐 繁 久

文集刊行にあたって

第64回「社会を明るくする運動」は「犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ」をテーマとし、全国的に取り組み、七月を強調月間として、働きかけています。

射水市でも中学生生活体験発表大会を開催し、更に市内小・中学生を対象に家庭生活、学校生活を通して日頃考えていることを題材として、作文、標語、ポスターの作品を募集いたしました。

作品コンテストには、市内小中学校から千七百八十六点と多数の応募をいただき、誠にありがとうございました。厳正な審査の結果各部門別に優秀作品を選び、作文の部門で最優秀作品小学生二点、中学生二点を射水市推進委員会より富山県推進委員会に推薦いたしました。

中学生生活体験発表大会で、今年は小杉南中学校二年生の御後愛良さんが市代表として富山県中学生生活体験発表大会に出場され、富山保護観察所長賞（富山県第二位）に輝きました。

十月五日に市作品コンテスト表彰式を大門総合会館に於いて開催し、射水市推進委員長、射水市長夏野元志様を迎え各部門優秀者三十一名、一人ひとりに賞状、賞品が贈られました。受賞された生徒の皆様には、本当に良い思い出になった事と思います。

当日は、保護者をはじめ祖父母多数ご出席いただき、ありがとうございました。受賞された生徒様には心からお祝いを申し上げます。優秀作品は、本誌に掲載させていただきます。

また、昨年度より始めた小学校六年生を対象に薬物乱用防止教室を今年度も継続することとして、射水市教育委員会、各小学校のご協力を得て進めているところです。この薬物乱用防止教室には（小杉・新湊・大門）三ライオンズクラブの皆様と協同で取り組み、薬物の怖さ、「危険ドラッグ」による最近の事故など、生徒さんや家族の皆様を知っていただき、犯罪や非行のない明るい地域社会を目指したいものです。ライオンズクラブの皆様には、改めてお礼申し上げます。

一連の活動を通して、犯罪や非行のない、子どもたちがスクスク育つ社会、安全安心な地域を築いて行くよう、市民の皆様と共に前進していきたいと思えます。今後とも、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

第64回”社会を明るくする運動“作品コンテスト

目次

発行に寄せて……………
 ”社会を明るくする運動“射水市推進委員会委員長
 射水市長

文集刊行にあたって……………
 射水保護司会 会長
 五十嵐 繁久 2

作文の部……………
 「笑顔」…………… 射水市立新湊小学校 六年 買場 美桜 6
 「あいさつのキャッチボールは自分から」…………… 射水市立大閤山小学校 六年 中村 心成 8
 「報われない努力も」…………… 射水市立射北中学校 二年 河野 早希 10
 「あきらめない心」…………… 射水市立小杉中学校 三年 松木 瑛莉子 12
 「借りた三十円」…………… 射水市立中太閤山小学校 五年 川渕 遥 14
 「自分の気持ち」…………… 射水市立大島小学校 六年 永廣 花梨 16
 「たった一言のあいさつが」…………… 射水市立小杉小学校 五年 小西 二葉 18
 「がんばられ」…………… 射水市立大門中学校 二年 加治 沙都 20
 「みんなで分かち合う」…………… 射水市立新湊中学校 一年 浦上 芹菜 22
 「誰かのために」…………… 射水市立新湊南部中学校 二年 浦上 羽 24

法務省社会を明るくする運動中央推進委員会主催
 第64回社会を明るくする運動作文コンテスト 法務大臣賞（最優秀賞）

小学生の部…………… 千葉県 小学校 六年 遠藤 陽和 26
 中学生の部…………… 山形県 中学校 一年 高橋 希望 28
 「優しい言葉で明るい社会を」……………

ポスターの部……………
 入賞者氏名 32

標語の部……………
 入賞者氏名 34

第33回射水市中学生 生活体験発表大会……………
 「母からの贈り物」…………… 射水市立小杉南中学校 二年 御後 愛良 36
 「ひいひいばあちゃんの手」…………… 射水市立射北中学校 三年 中村 舞 38
 「これからの福祉社会に求められること」…………… 射水市立新湊南部中学校 三年 原田 展佑 40
 「僕にとつての地域の先生」…………… 射水市立新湊中学校 三年 二口 鷹成 42
 「命あることの尊さをかみしめて」…………… 射水市立小杉中学校 三年 西井 乃々華 44
 「困ったときはお互い様みんなで支え合う社会に」…………… 射水市立大門中学校 二年 稲垣 奈央 46

第64回 “社会を明るくする運動”

作文コンテスト 入賞作文集

〔射水市推進委員会推薦作品〕

「笑 顔」

射水市立新湊小学校 六年 買^{かい}場^ば美^み桜^お

現在の社会に対し、自分ができることは、友達を傷つけたり、態度を変えたりせず、人の気持ちを考えて行動することです。今の世の中はいじめがとても多く、一部の人たちだけで遊んだりして、友達の心を傷つけたり、悲しませたりして、その気持ちを考えられない人が多いと思います。クラスや学年のみんなにめいわくをかける人もいます。

私は、いじめられていた時期がありました。自分だけ仲間はずれにされたり、話しかけようと思ったら無視されたり、水とうの位置を変えられたりを毎日されました。毎日、学校に行きたくありませんでした。学校に行っても休み時間は一人ぼっちで、どうせ楽しくないと思っていました。誰かに相談しないといけないと思ったこともあったけれど、とても勇気がいったし、またはぶかれるんじゃないかと友達をおそれていました。いじめられることはとても悲しく、辛い思いをするということがその時、よく分かりました。

ところが、よく分かったはずなのに私は人をいじめてしまいました。いじめられている人は、毎日泣いていました。とても辛いんだなと分かっているのに、仲間はずれなど自分がやられたことを相手にもやってしまいました。その時はじめて、いじめる人は楽しいのだということがわかりました。けれど、いじめられている人はもっと悲しいと思い

ました。その時に改めて、人の気持ちを考えることはとても大切だなと感じました。

そこで、人の心に傷をつけたくない、いじめると後悔するだけだと思い、友達の気持ちを考えることに気を付けながら、話すようにしました。すると、だんだんに人の気持ちを考えてしゃべることができるようになりました。このことから、一人ひとりが気持ちを考えることを意識して、友達としゃべるようにすれば、いじめがなくなり、いじめられて辛い思いや悲しい気持ちになる人がいなくなり、みんなが笑顔になり、社会が明るくなるのではないかと思うようになりました。

私は、社会が明るくなるため一番大切なことは、世の中に笑顔が広がりみんなが笑顔になることだと思います。学校に行くのが楽しいと思ったり、友達がいることの大切さを知ること、みんなが笑顔になることにつながり、そして、社会が明るくなっていくことに、つながると思います。

〔射水市推進委員会推薦作品〕

「あいさつのキャッチボールは自分から」

射水市立太閤山小学校 六年 なか中 むら村 しん心 せい成

何だろう、この気持ちは。この日は、朝からずっともやもやした気分でした。

太閤山小学校には、登下校を見守ってくださる「見守り隊」の方がたくさんおられます。ぼくも毎日、通学路に立っておられる「見守り隊」の方に車を止めてもらい、あいさつをして学校に来ます。

この日も、いつも通り登校したはずでした。もやもやの原因が分からないまま下校時刻を迎えました。見慣れた通学路に、いつもの見守り隊の方。いつもわたる横断歩道にさしかかったとき、見守り隊の方が車を止めてくださいました。そしてぼくが横断歩道をわたりきったとき、

「ありがとうございます。」

という大きな声が聞こえてきました。それは、止まってくれた車の運転手さんに対する、見守り隊の方の声でした。

「これだったんだ。」ぼくは、はっとしました。一日ぼくをなやませたもやもやの原因が分かったからです。朝も同じ場面に出会っていました。止まってくれた車にむかってお礼を言うのはぼくのはずなのに。見守り隊の方が大きな声でお礼を言って、ぼくは当たり前前みたいにだまって通りすぎている……おかしいと思いました。

見守り隊の方にぼくのかわりに大きな声で車に向かってあいさつをしても良かったことがずっと心の中にあり、ぼくは、何かしたいと思いました。朝と帰りだけに会おう人に、ぼくができることってなんだろう。いろいろ考えましたが「見守り隊よりも先にあいさつをしよう」と思いました。これなら自分にもできそうだったからです。

いつもの 横断歩道にきました。ぼくは

「おはようございます!」

と、こっちから先に言いました。目標達成です。すると、見守り隊の方は、

「おお、今日はえらい元気がいいなあ。」

と行ってくださいました。今までは、向こうからされたあいさつに答えているだけだったので、ぼくのすっきりした気持ちを受け取ってもらえた気がして、すがすがしかったです。

また、いつもよりおそい時間に横断歩道に来てあいさつしたら、
「今日は遅いな。腹でも痛かったんか。」

と心配する声をかけてくださいます。

ぼくは、朝のこの短い会話のキャッチボールが楽しみになりました。そして、止まってくれる車にも自分からお礼をしたいと考え始めました。最初は一礼することから始めました。すると、車の運転手さんも頭を下げてくださいました。次に、笑顔で一礼することに心がけました。すると、運転手さんも笑顔で頭を下げてくださいました。またぼくの気持ちを受け止めてもらえたようで、達成感がありました。さらに、友達にも「自分から」あいさつをしたり、お礼をしたりをすることをすすめてみました。友達と一緒に元気よさがパワーアップでした。あいさつすると、

「おお、いつも以上に元気いっぱいいな。」

と言ってもらいました。友達と一緒に腰をいっばい曲げて車の人に一礼すると、窓から

「元気やな、気付けていってらっしゃい。」

と言ってもらえました。

「おはようございます。」「元気だね。」朝、横断歩道をわたるほんの一しゅんだけでできるあいさつは、本当に短い言葉ですが、たくさんの人と元気にできる、キャッチボールのようない言葉だと思えます。ぼくが感じたようなうれしさを、もっと広めたいです。そのために、ぼくは自分からあいさつというボールを相手に投げかけることを実行し続けたいです。あいさつのリーダーとしてみんなの手本となり、笑顔いっばいのあいさつを広めていきたいです。

ぼくは、今「絶対に自分からあいさつをするぞ」と心にきめて、毎日登校しています。

〔射水市推進委員会推薦作品〕

「報われない努力も」

射水市立射北中学校 二年 河^{こう}野^の早^さ希^き

午前六時起床、七時十分に家を出て登校。かけもちとしてバトミントン部と駅伝部に所属し、練習するのが私の日課です。駅伝部の活動時間は始業前なので、このような時間に学校へ行っています。

もともとは、体力づくりの一環として始めた駅伝でしたが、県大会や元旦マラソンへの出場などを経て、私はバドミントンに負けないくらいに力を入れるようになりました。

入学当時、先輩方に誘われて駅伝部に入部した私は、正直気が気でありませんでした。朝は早いし、体力的にも辛しいし、毎日学校に行くのが憂鬱でした。けれど、先輩方に「あと一周やよ。」と言われたり、同級生に「頑張ろうね。」と励まされたり、いろいろな人に支えられることで、今では走ることが好きになりました。

それでも私は、メンバーの中で一番遅いです。時々、集団で走る列から外れることがあり、迷惑をかけてしまいます。どんどん離れていく先輩方を見て、とても悔しい思いを何度もしました。どんなに走ることが好きでも、実力もセンスも私にはないのだと打ちのめされることもありました。

けれどこのまま諦めるのだけは嫌でした。私は、自分ができる限りの努力をしました。朝は駅伝をし、夜はバトミントンをくたくたになるまで頑張りました。少しでも駅伝メンバーの皆に近づけるようにと、春休みにはランニングもしました。

しかし、『遅い』という事実は変わらず、そのまま二年生を迎えてしまうことになりました。

確かに、努力が百パーセント報われるわけではありません。分かっているけれど、現実を突きつけられると、辛くて『やめようかな。』と思うこともありました。

そんな時、駅伝のメンバーで揃えたシューズバックの寄せ書きや、駅伝のメンバーからもらった年賀状を見ます。『一番頑張り屋さん』とか、『努力家』など、先輩や同級生から、たくさんの言葉が書かれてあるのです。

努力は報われなかったけれど、皆は、私のことを見てくれました。

これを見ると、嬉しさがこみあげ、勇気をもらえます。自分がやってきたことは無駄じゃなかったんだと思います。私はこのシューズバックと年賀状に、何度も救われました。そして、この二つに、駅伝メンバーの方々からの温かい気持ちを感じました。自分のことを認めてくれる人がいてくれるのは、いくつになっても嬉しいものです。

人には向き不向きがあり、どんなに努力してもその穴を埋められないことがあります。けれど、何とか皆に追いつこう、強くなろうと努力する姿を、人は見てくれているのです。このような体験を通して私は、結果がどうであれ、努力することの大切さを学びました。私は、学んだことを活かし、より一層の努力をしようと思います。

午前七時十分。私は今日も、家を出て学校に向かいます。

「射水市推進委員会推薦作品」

「あきらめない心」

射水市立小杉中学校 三年 松^{まつ}木^き瑛^え莉^り子^こ

努力をすることは大切だ、とは思う。しかしどれほど頑張っても報われないときだってあるし、手の届かないときもあることは知っている。本当は頑張りたい。でも努力すればするほどそれにつり合う結果が出なかった時に自分への自信が無くなっていく。それならほどほどの努力をして、ほどほどの結果を残せばいい、という気持ちになってしまう。そんな弱い心が成長できたのはあの夏の吹奏楽コンクールがあったからだろう。

私は吹奏楽部でバストロンボーンを担当している。バストロンボーンはトロンボーンという楽器の中でも、一番低い音を主に担当している楽器であり、小杉中学校には二つしかない。さらに、今バストロンボーンを吹いているのは私だけで、コンクールでは、なくてはならない楽器といっても過言ではないと思う。つまり、私は何としても夏のコンクールにすべて出場しなければならなかった。しかしそのためには、オーディションに合格する必要があった。

夏の間はとにかく譜読み、楽譜を早く覚えて、音の強弱や音程にも気を付けた。三年生の先輩にアドバイスをいただき、毎日汗水垂らしながら練習に励んだ。オーディションは何度かあった。自由曲の一番難しい部分を抜き出して、三年生と顧問の先生に聴いてもらい、合格だと思ったらずを挙げてもらうというものだ。大勢の中、一人で吹くのでとても緊張する。私は練習をしたし大丈夫だろうと思っていたが、いざその時になると緊張して体が固まってしまった。そして一発目の音から外してしまったのだ。当然、誰一人として手は挙がらなかった。私はこらえきれずに涙がこぼれてしまった。そのオーディションに落ちたのだ。終わった後、先生が今回のオーディションは本番ではなく、自分の実力に気付いて直すためのものだったとおっしゃった。いつもよりも緊張していたから音を外しただけだ、普

段の私なら音を外していなかったなどと自分に言い訳をしていた。しかし家に帰ってからもう一度先生の言葉を思い出して冷静に考えてみた。本当にいつも頑張っていたのか？頑張っていると思っていたのは自分の思い込みだったのではないかと。トロンボーンパートの三年生の先輩は絶対に音を外さない。どんな基礎練習も手を抜かずに本番を想定して練習していた。それに比べて自分はどうかだったか。一度音を外しても何回も練習したり、本番のような緊張感をもって練習したりしていなかったことに気付いた。

それからは毎朝のリップスラーという練習を本番のように吹き、ミスがなくなるまで何回も練習した。必ず毎日、これだけは続けようと決めた基礎練習をした。

そして最後の大会を迎えた。今まで自分の信じた練習を続けていたことで自信をもって演奏ができた。今までで一番いい演奏だった。部員全員が目指していた文部科学大臣奨励賞をいただいた時は感動で涙があふれた。

夏のコンクールで一位に相当する賞をもらえたのは、辛い練習から逃げずに何回も練習したからだと思った。ほどの努力では、絶対にもらえなかった賞だ。自分は努力をしている、と思っていたが報われずに、あきらめてしまっていたら、絶対にコンクールに出て貴重な経験をさせてもらえなかったと思う。自分の弱い心と向き合って少しずつでも直していければ成長できるということを学んだ。

努力をしても報われない時もある。しかし、そこであきらめずに努力をし続ける人間になりたい。それが幸せな未来につながっていることに気付けたから。

「借りた三十円」

射水市立中太閤山小学校 五年 川^{かわ} 渚^{ぶち} 遥^{はるか}

私は、JRで小杉駅から富山駅、そして市内電車に乗り換えて、バレーに通っています。帰りは夜遅くなるので、車で迎えに来てもらっています。

ある日、明るい時間に終わるので電車で帰ることになりました。市内電車に乗り富山駅に着いたので、何分発の電車に乗れるのかを電話で母に伝えようと公衆電話を見ました。すると赤いランプが消えていて、テレホンカードが使えなくなっていました。そこで私は、財布からたった一枚の十円玉を取り出し、電話をかけました。けれど、時間が短すぎて話ができませんでした。それに、もう十円玉はありません。困った私は、持っているお金を両替しようと駅員さんに、

「両替機はどこにありますか？十円玉がなくなってしまって、母に電話をかけられないんです。」

と云いました。するとその近くにいた制服を着たおじさんが、自分のポケットから財布を出し、

「このお金を使って、お母さんに電話をください。」

と言いながら、三十円を私にわたしてくれました。私は、少しとまどいながら、

「ありがとうございます。」

と言い、すぐに公衆電話へ走って行きました。母と話することができて、ほっとしました。

その夜、今日の出来事を母に話すと、

「ええっ。お金をわたしてくれたの？紙に住所や名前を書いてきた？」

と言われ、私は、

「ううん。書かなかったよ。自分の財布からお金を出してくれたみたいだった。」

と答えました。それを聞き、母はおどろいて

「ええっ。自分の財布からお金を出してくれたの？じゃあ、今度、三十円を返しに行こうね。」と言いました。母の言う通り、お金を借りたら返すのは当たり前だけど、知らない人に返せるのかなと私は思いました。

その一週間後、私は母と一緒に富山駅へ三十円を返しに行きました。しかしそこにいたのは、私にお金をくれたおじさんではなく別のおじさんでした。そのおじさんに事情を話すと、

「そうですか。じゃあ今度、だれがそういうことをしたのか聞いてみますね。一応、連絡先を教えてください。」と言われて、私は紙に連絡先を書きました。

その翌日、私がバレエに行っている間に家に一本の電話がかかってきました。それは私に三十円をくれたおじさんからでした。おじさんは、

「昨日はお金を返しに来てくれたことを聞いてとてもうれしかったです。返してもらえとは思っていませんでした。お金なので、私に返すかわりに困っている人の役に立つようなお金に協力してあげてください。」

と話していたそうです。世の中には、この人のように親切で、人の役にたちたいと思っている人がいることは分かっています。しかし、自分が体験するとは思っていませんでした。自分もだれかの役に立てたらいいなと思っていたので、言われた通りにぼ金することにしました。次の日私と母は、ぼ金箱に三十円を入れました。

世の中が駅で出会ったあのやさしいおじさんのような人でいっぱいになれば、笑顔があふれる楽しい毎日をみんなが送れるようになると思います。三十円を入れたぼ金が、人の役に立てばうれしいです。

「自分の気持ち」

射水市立大島小学校 六年 永^え 廣^{ひろ} 花^か 梨^{りん}

「おはようございます。」

この言葉が今日一日の始まり。この言葉をかけられただけでさわやかな気持ちになった。だからわたしはいつも登校中は元気にあいさつしている。だけど以前は全然だめでした。

わたしが小学校に入ってももない日、六年生のあとにつづいて登校しました。人が通っても無視。

「おはようございます」

と声をかけられても無視。こんな日がずっと続いていました。ある日、ポプラの集いで校長先生に、

「あいさつは、とても大事です。あいさつは友達を作る第一歩です。なので登校中の地域の人たちにはちゃんとあいさつをしましょう。」

この言葉がきっかけで、次の朝は六年生さんのあとに続いてあいさつをしました。すると、

「いってらっしゃい！気をつけてね。」

とあいさつを返してくれました。それから、ずっと下を向いていたわたし、学校でもはずかしがり屋のわたしは、どんどん積極的に、元気で大きなあいさつをするようになり、学校でもどんどん発表できて、友達もいっぱい作れま

した。

こんなことがありました。下校中に友達としゃべって帰っていました。すると家の前のイスですわっていたおじいちゃんに会いました。ふつうにあいさつをすると、

「おう。おうおう。」

とジェスチャー付きで話してきました。このおじいちゃんは、しゃべられなかったそうなのです。今ではいつもみんなでジェスチャーでわかることはちゃんと返しています。ずっと曲がり角まで私たちを見おくらせてくれます。わたしはこのあいさつで、みまもり隊の方とも知り合いになったし、そのおじいちゃんとも仲良くなりました。また、学校の「あいさつ大名人」にもなりました。

こういうあいさつが社会を明るくするための第一歩だと思います。あいさつをかわし、知り合いや友達がどんどんふえ、みんなからも好かれる。はずかしがりやのわたしはやめ、自分の気持ちにすなおになりこれから明るく楽しい社会をつくれるようにがんばりたいと思います。

「たった一言のあいさつが」

射水市立小杉小学校 五年 小西二葉

「おはようございます。」

「おはよう。」

と、地域の方々が声をかけてくださいます。私たち射水市小杉小学校では、朝、七時ぐらいから八時ごろまで、午後は、三時ごろから四時ごろまで登校下校のときに横断歩道に立ってはたを持っていっしょにわたってくださいます。私はそんな地域で育っているのがとてもうれしいです。

わたしの小杉小学校では、代表委員会の人が決めた『杉っ子八つの愛言葉』という言葉があります。とてもいいと思うので紹介します。

「ありがとうの数だけ、やさしくなれる」

「ごめんなさいの数だけ、かしこくなれる」

「おはよう、こんにちは、さようならで 心をつなぐ」

「あそぼうよの数だけ、友情をふかめ」

「だいじょうぶの数だけ、思いやりアップ」

「すごいね、えらいなの数だけ素直になって」

「転んだらおきで、たくましく」

「これは（ここは、いまは）みんなのもの、人のもので、決まりを学ぶ」

見えない心を言葉にのせてあったか空気をつくります。

この愛言葉は、一つずつ集会で取り上げられ、楽しい劇となって発表されています。

だけど、劇は楽しいことだけではありません。日常の家庭生活での犯罪・非行は決してやってはいけないことです。そんな発表を見て私その日からずっと考えていることは、「そんなことをしてうれしいのか」や、万引きの話を聞いて、「こんなことをしてとったものが自分の手に入ってうれしいのかな」などと思っています。こんな犯罪や非行が世界に広まってみんなが、悪い人になっていくので、社会を明るく楽しくするためには、『杉っ子八つの愛言葉』の三つ目の「おはよう、こんにちば、さようならで 心をつなぐ」

という言葉がいいと思います。知らない人でも地域の人でも、あいさつをするということです。そしたら、地域の方々と心がつながることができます。これは私も経験したことがあります。知らない人に声をかけてみようかなと思うときやあいさつを試してみようかなと思うとき、勇気が出ずにいつの間にか通り過ぎて行ってしまったのです。だけど、私の父と母に、

「知らない人でも、あいさつをしなれば、自分が大人になった時にふうちゃんが困るんだよ。」

といわれ、次の日から知らない人や、地域の人に自分からあいさつするときもあったり、先に地域の方が「おかえり。」

など声をかけてくださるこのことも数多くあります。こんなときは、とても心がつながった感じがします。

たった一言のあいさつが地域の方々と心をつなぐことができる。みんながちょっとした勇気を出せば、今よりも明るく楽しい町や市や県・国・世界になるのではないかと思います。たった一言のあいさつがこの社会を明るくするのだと思いました。

「がんばられ」

射水市立大門中学校 二年 松^{まつ} 長^{なが} 沙都希^{さつき}

帰る家がある。そこには家族がいる。学校に行く。ご飯を食べる。友達がいる。勉強をする。こんなことは当たり前だと思っていました。だから、家族の誰かがいなくなるなんて思ったこともなく、またそれによって日常生活の大切さを実感するなんて思ってもいませんでした。

昨年さくねんの冬、雪が降る寒い日のことでした。祖父はちょっとした散歩をすることが毎日の習慣でした。その日も元気に出かけました。ところが、その日はいつもより帰ってくる時間が遅かったのです。家族は気にかけていましたが、私は近所の人とお話でもしているのだろうと思い、そんなに気にはしていませんでした。

しばらくして、祖母が慌てた様子で「じいちゃん、外で歩けなくなって座ってる」と叫びながら父を呼びました。慌てて外に出ていく父を見て私は驚きました。大丈夫かな？どうしたんだろう？ 何が起ったんだろう？

いろいろなことが頭の中に浮かびました。私は怖くなって祖父の所に駆けつけることもできずに、ただ父や祖母を待つだけでした。父が帰ってきたとき、おそろおそろ「どうやった？」と聞きました。「雪で滑って転んだだけだよ」と聞き、私は一安心しました。

念のため病院で検査してもらうと、足の付け根が複雑骨折していたため、祖父は入院治療をすることになりました。骨折なんてすぐに治る。祖父はすぐに家に帰ってくる。お見舞いに行くと元気そうだし、手術も成功して徐々に回復していきました。私たちのいつもの当たり前の生活がまた始まる。そう思っていました。

ところが、ある日、「急に体調を崩した」と病院から電話がかかり、その数日後、祖父は亡くなりました。祖父の突然の死に、私は実感がわきませんでした。祖父を家族全員で見送ることができなかったことは今でも心残りです。もっとお見舞いに行けばよかった。もっとたくさん話をしたかった。私が「行ってきます」と言うと、必ず「がんばってこられ」と返してくれた祖父。もうこの声を聞くことはできません。そのとき私は、いるのが当たり前だと思っていた祖父が自分の中ではとても大切な存在だったことに気づきました。

「がんばられ」

祖父が残してくれた私の大好きな言葉です。この言葉にはたくさんの思いがこめられています。これから先、たくさんの辛いことがあると思うけれどがんばれ。諦めずにがんばれ。悔いが残らないようにがんばれ。

私は何があってもがんばり続けます。明日何が起きるか、どうなるかは誰にも分からないから、今できることを一生懸命がんばりたいです。そして、祖父がいつも応援してくれていた私の夢を叶えたいと思っています。当たり前前の生活に感謝し、一日一日を大切に毎日を楽しみ過ぎていきます。いつか祖父にいい報告ができるまでがんばり続けたいと思います。

「みんなで分かち合う」

射水市立新湊中学校 一年 加^か治^じ芹^{せり}菜^な

私は五才の時に決して忘れられない経験をしました。大変だったけれど、その時大事なことに気づき、それを学び、実行することができたのです。

始まりは、幼稚園での内科検診を受けたことからでした。「心臓から雑音が聞こえる」と言われ、病院でもう一度詳しく検査したところ、心臓病だと分かり、春休みに入院しました。手術をしなければならぬ恐怖と、なぜ自分がそんな病気にならなければいけないのかという思いで、私の心は暗くなりました。

そんな時、母がこんな言葉をかけてくれました。

「大丈夫。お母さんがいつも応援しとるから。一緒に頑張ろう。」

この言葉で、私は勇気づけられました。とても心強かったです。

そして、いよいよ手術の日がやってきました。私はとても緊張しましたが、手術が無事成功しました。

手術後、思うように体が動かず落ちこんでいた私に、うれしい出来事がありました。幼稚園の担任の先生がわざわざお見舞いに来てくださったのです。面会謝絶で会うことはできませんでしたが、先生は、「おひさまパン」という本をくださいました。それは太陽が出てこない町に、太陽が出てくることを願った犬のパン屋さんが、太陽の形のパンを作ってみんなに分けてあげました。すると、町はおひさまパンがもたらした喜びで満ちあふれ、ついに本当の太陽が出てきてくれたという物語です。

私は、その本の希望ややさしさをみんなに分けてあげれば、辛いことも乗り越えられるというところに、感動しま

した。また、病院の先生や看護師さんの励ましの言葉で、希望を持つことができました。

そして退院の日が近づいてきました。わたしは感謝の気持ちを伝えたいと思い、お世話になった先生方に、似顔絵をプレゼントすることにしました。心をこめて似顔絵を描いたことは、今でもよく覚えています。似顔絵を渡した時、先生方が喜んでくださったことが、とてもうれしかったです。

私は、この経験から、辛い時は互いに支え合い、励まし合うこと、また、「ありがとう」の気持ちを伝えることの大切さを学びました。そしてその積み重ねが、心が温かくなる人を増やしていくのではないかと思います。

世の中には、高齢の方や、体が不自由な方がいます。以前、その方たちを見下したような言葉を耳にしたことがあります。私が、その立場だったら、とても悲しい気持ちになると思います。どんな時も、相手の立場に立って考え、力になれることを探していくことが大切だと思います。

私は今、私を支えてくれている人がいるから、毎日楽しく過ごせているのだと思います。お世話になった病院の先生や幼稚園の先生、家族には、今でも感謝しています。病院での経験を通して、たくさんの方が私を支え、励ましてくれていることを、強く感じることができました。これからも、どんなに辛いことがあっても、みんなで励ましあって、乗り越えていきたいです。そして喜びややさしさを分かち合える仲間がいるということを、たくさんの方が私を支えてくれているということのをこれからも忘れずに、生きていきたいです。

「誰かのために」

射水市立新湊南部中学校 二年 浦上生羽

私は、小学校の卒業式を終えた日の夜に、東京に行きました。高校三年生になる兄に、一度、都会の大学を見学させるためです。テレビでは何度か見たことのある東京大学も、実際に行ったらものすごく広い学校だったのでびっくりしました。また、都会は道路も広く、信号が青になったとたん、多くの人が一斉に歩き出すのにも驚きました。

富山県の田舎育ちである私にとって、東京はあらゆるものが新鮮に映りました。そんな中で一番感動したのが、駅のエスカレーターです。都会のエスカレーターは、整然としていました。あまり急いでいない人が左側に寄って、右側は急いでいる人のために空けてありました。私は駅を利用することがないのでここで初めて知りました。都会には人が多いだけに、生活しやすいようにいろいろルールがあるのだということ。

このように、他の誰かのために、ほぼ無意識に行動できているのはすばらしいことだと思います。都会だからこそ、ということもあるかもしれませんが、それならば田舎にも、田舎だからこそ、があると思います。

私の地域は毎年四月に、小さな祭りがあります。その祭りには獅子舞があって、その練習はいつも夜に行われます。ある日、私は練習までの時間近所のあぜ道を歩いていました。ふと田んぼや草むらに目をやると、異様にゴミが落ちていて気がきました。空き缶もありましたが、特に多かったのがタバコでした。たぶん車の走行中に捨てたものだと思います。私はそれに気づいたとき、とても嫌な気分になりました。草むらに捨てたのは、隠すためだろうけど、もし引火したら、植物が育たなくなったら、おそらくそこまでは考えなかったのだと思います。タバコを捨

た人にとっては、関係のないことかもしれませんが、近くに住む人にとっては、とても迷惑なことです。おしゃぶりではなく、タバコを吸っている大人なのだから、しっかりと考えてほしいと思いました。

田舎は都会より緑がたくさんあります。この都会に勝っている緑を、「田舎だからこそ」にしたいと考えました。最初から無意識に、というのは無理なので、意識的に地域の清掃を心がけていきたいと思いました。本当にきれいになったら、ポイ捨てしていた人も少しは捨てるのをためらうと思います。そうして町の汚れがなくなれば、地域のためになると思います。草木も心おきなく光合成をして、酸素を出してくれると思います。この行為は自分のためにも、誰かのためにもなると思います。最近の科学技術の進歩によって新たな機械が開発されるのは嬉しいことだけど、それによって二酸化炭素が増え、地球の環境が悪化することがあるかもしれません。地域の清掃活動で緑が活性化すれば、地球のためにもなっていくのではないかと思います。

日本は事件も多く起きていますが、まだ平和な国だと私は思っています。この国に生まれたこと本当に嬉しく思います。困った人を助ける日本人。見ず知らずの人に一生懸命手を差し延べる日本人。

小さなことでも自分ができる「誰かのために」

私から誰かへ。日本から世界へ。「誰かのために」

第64回 ”社会を明るくする運動“

作品コンテスト ポスターの部

作品コンテストポスターの部入賞者

★	射水市立欽の森小学校	五年	小林	空
★	射水市立新湊小学校	四年	高木	真奈佳
★	射水市立放生津小学校	六年	渋谷	知夏
★	射水市立東明小学校	五年	岩井	希愛
★	射水市立東明小学校	五年	波	ゆき乃
★	射水市立作道小学校	五年	栢	万智
★	射水市立作道小学校	四年	石黒	月葉
★	射水市立小杉小学校	六年	宮崎	亜由美
★	射水市立大島小学校	五年	米澤	咲良
★	射水市立大島小学校	五年	原田	和芽奈
★	射水市立塚原小学校	五年	谷嵐	千桜

第64回 “社会を明るくする運動”

作品コンテスト 標語の部

小学校の部

★「やめようよ」	言える勇気を	みんなの心に	射水市立作道小学校	四年	京 きょう 谷 たに	萌 も 枝 え
★ありがとう	たった五文字で	笑顔咲く	射水市立作道小学校	五年	林 はやし	貫 かん 太 た 郎 ろう
★あいさつは	目と目を合わせる	きれいな心で	射水市立塚原小学校	五年	向 むかい 山 やま	湧 ゆ 月 づき
★スマートフォン	とっても可愛い	せいきゅうしょ	射水市立大島小学校	四年	永 なが 森 もり	陽 ひ 彩 いろ
★万引きは	やさしい心も	ぬすむんだ	射水市立下村小学校	五年	山 やま 口 くち	円 まど 香 か
★見て見ぬふり	それもりっぱな	いじめです	射水市立東明小学校	五年	丸 まる 田 た	菜 な 々 な 美 み
★「やっちゃった」	心にのこる	黒いトゲ	射水市立金山小学校	六年	東 ひがし 山 やま	新 にい 奈 な
★にげようよ	とおりすがりの	しらぬこえ	射水市立片口小学校	二年	丸 まる 池 いけ	壺 いっ 晟 せい
★ひとりより	みんなであそぶと	たのしいね	射水市立片口小学校	二年	横 よこ 井 い	千 ち 依 い 子 こ
★あいさつの	山びこがっせん	ひびくまち	射水市立新湊小学校	二年	脇 わき 坂 さか	駿 しゅん 一 いち

第33回 射水市中学生

生活体験発表大会

〔富山保護観察所長賞 射水市推進委員会最優秀賞〕

「母からの贈り物」

射水市立小杉南中学校 二年 御後愛良

”人生を棒にふる“それは、せっかく生まれてきたのにそれをむだにする。と言う意味です。私はこの言葉を母から毎日のように言われてきました。最初はなんでこんなことをしつこく言われなくちゃいけないんだろうとっていました。しかし、その母の言葉が心の中でひっきり自分の行動を見直してみました。

私は入学前は、友達がいっぱい増えて、すごく楽しい中学校生活を想像していました。しかし、予想とは違い、思っていたよりも現実はずらいいものでした。「けんか」や「悪口」「かげ口」が多いことでした。私にとっては友達とっている人からの何気ない眼を見ただけでも、自分はこの人から”嫌われているのかな”と不安を感じてしまったり、自分の思い込みだけで、相手を傷つけてしまいそうで怖くなりました。

また、以前けんかになった時、自分の素直な気持ちが言えず後悔してしまいました。あやまりたい気持ちはあっても、逆に攻撃する言葉ばかり言ってしまったりして、どんどん関係は悪くなっていきました。その時は誰にも頼れず悲しい毎日を送っていました。

こんな時、母に頼ってもただ心配させるだけなので相談もできませんでした。このままずっと、友達とうまく関われずに中学校生活を送るのかと思うと、いつも暗い気持ちになり学校へ行くのも楽しく思えませんでした。それに私は、友達といっしょにしていると「その子が今どう思っているのか」をまず考えてしまい、授業に集中できず、何となく友達に合わせながら授業中でもしゃべっていました。私にとっては友達としゃべれるので楽しい時間でもありました。でもこれは、ダメなことだと分かっていました。「変わらなきゃ」と思っても、どこか心の中で正しいことをする

ことへの「不安」な気持ちの自分もいました。

そんな中で「やればできる」ということを教わるきっかけがありました。私には兄がおり、以前まではまったく勉強に関心がないと思っていたのに、必死に勉強している姿を目にしました。その突然の変化に私は驚きました。そして兄は、結果を出し、今までなかったような変わっていく姿に私は、「やればできる、人は変われる」という気持ちが湧いてきました。「変われる」という言葉が私に自信をつけてくれる言葉でもありました。

今は兄を見習いしっかり授業に取り組むように努めています。それに、ほかのクラスの友達と話をしたり、部活動で先輩や同級生と同じ目標に向かって活動したりしながら楽しく生活しています。少しずつ兄を目標にして取り組んでいくうちに勉強がより楽しくなりました。また家に帰って家族と話すことが多くなりました。

今ふりかえてみると、人との関わりとはとても難かしいですが、自分の人生さえも左右するくらいに大切なんだと思っています。「友達との付き合い方を考えなさい」と母に言われていました。「いつも友達に合わせることを優先していると、自分が自分でいられなくなる」、そう思うとまったく感ずけません。だから今は、自分らしくできること、それは先生や家族からの言葉に対して素直に耳を傾けられる自分を大切にしていこうかと思ひます。

この体験をしたことで、自分らしく日々を送ることの難しさも知りました。傷ついている人の気持ちに歩み寄り、一人でも多くの友達を大切にしていきたいと思ひます。

母に言われ続けた“人生を棒にふる”という意味が少しだけ分かったような気がします。この一生に一度しかない中学校生活を後悔しないように、正しい判断ができる自分でいたいです。

「ひいひいばあちゃんの手」

射水市立射北中学校 三年 なか 中 むら 村 まい 舞

「おばあちゃん。ひさしぶり。」そう言った私の前できょとんとするひいひいばあちゃん。」

そして、「おばあちゃん。まいだよ。ばあちゃんの玄孫だよ。」と言うお母さん。ばあちゃんに会うと必ず最初の会話がこうで、ばあちゃんは私をおぼえていてくれませんでした。でもばあちゃんは、私が玄孫だと分かると、ぱっと笑顔になっていつも握手をしてくれました。ばあちゃんの手はあったかくてやわらかくて、今でも感触をおぼえています。私をおぼえていてくれないことは悲しかったけれど、ばあちゃんの手が大好きな私は、ばあちゃんが私の手をぎゅっと握ってくれることだけで、すぐにハッピーになっていました。

しかし、三年前、大好きなばあちゃんは、百一歳で他界してしまいました。ばあちゃんの死を知らされたとき、まだ死がよく分からなかった私は、ぜんぜん実感がわきませんでした。でも、死んだばあちゃんの手を握ったとき、生きていたときとは違い、冷たくてかさかさで、そのときはじめてばあちゃんは死んでしまったんだと理解しました。もう、あのやわらかくて温かい手に触れることができないと分かり、悲しくて苦しくて、涙がこみ上げてきました。しかし私は、大好きなばあちゃんの手からたくさんのお話を学びました。人が生きているということは、どれだけ素晴らしいことか。人の命の重さ。そしてなにより、ばあちゃんの手は私の手より小さいのに、その手で百一年間生きてきたことは、本当にすごいことなんだと学びました。そんな私を見た母は、ばあちゃんの話のいろいろ聞かせてくれました。

ばあちゃんが生まれた時代は明治時代。なんと、明治、大正、昭和、平成と四つの時代を生きてきたことになりました。ばあちゃんは戦争を経験しています。だからなのでしょう。弱音を吐かない強い人だったそうです。

明治時代となると、もちろん学校はありません。毎日毎日家の手伝いや、兄弟のお世話、畑仕事ばかりで、苦勞してがんばって、でも誰にもほめられることはなかったそうです。しかし私の母は「ばあちゃんはすごく厳しかったけど、私がすごいことしたり、良いことをしたりすると、たくさんほめてくれたんだよ。」と、言っていました。それはたぶん、自分のように誰からもほめられずに育ってしまったのは、絶対だめだと思ったからなのかなと思いました。そんなばあちゃんは、百歳の誕生日、初めて賞状をもらいました。市長さんや老人ホームのみなさんと盛大にお祝いしました。そのとき、ばあちゃんは、声も出ないほど弱っていました。それでも最初で最後の賞状を私の大好きな手でいっしょうけんめい受け取っていました。そのときのばあちゃんの顔は、すごく嬉しそうに笑っていました。

母からいろいろな話を聞き、私はもっともっぱあちゃんのことを好きになりました。自分があまり感じることでできなかった、人からほめられることの嬉しさを、孫にめいっぱい感じさせてあげたいというばあちゃんの愛情がすごく伝わってきたからです。だから私は、ばあちゃんのような決して弱音を吐かない強い人になりたい、そして、私があればあちゃんの手から何かを学んだように、誰かに何かを学ばせてあげられるような手の持ち主に、また誰かに大好きになってもらえるような手に、私はなりたいです。

「これからの福祉社会に求められること」

射水市立新湊南部中学校 三年 原^{はら} 田^だ 展^{ひろ} 佑^{すけ}

僕の父方の祖父母は、山口県に住んでいます。祖母は優しく、とてもしっかりした人でした。地域の社会教育活動や婦人会活動などにも積極的に取り組んだりしていました。

ところが、三年程前に祖父が倒れたときに大きなショックを受け、その後、祖母の様子は少しずつ変わっていきました。今まで当たり前できていたことが次第にできなくなっていったのです。料理ができなくなり、物忘れがひどくなり、近所から自分で帰ってくることもできなくなっていきました。

最初にその変化に気付いたのは、近所の方々でした。「病院へ行った方がいい。」と言われ検査をしたところ、アルツハイマー病であることが分かりました。

僕の祖父母は二人暮らしです。病気が分かって以来、祖父による介護の日々が始まりました。僕の父はとても心配し、仕事の関係で隣の島根県に行くたびに山口県の実家に寄り、祖父母の様子を尋ねています。

日々の介護の大変さの一つは、祖父が慣れない食事の準備をしなければならないことです。そのため母は折を見て、簡単に調理できたり、すぐに食べられるようなものを送ったりしています。あんなにしっかりしていて、家のことを切り盛りしていた祖母が、このような状況になるといことは、僕には信じられませんでした。以前の祖母の姿を知っているだけに、今の祖母の姿を見ているととても胸が痛みます。

祖父母にとっては、僕の顔を見られることがとても嬉しいことのようにです。しかし、山口県は遠く、本当にたまにしか会いに行けないので、僕は祖父母の力や助けにならないことを心苦しくも思います。それでも、たまに会うと、

祖母はちゃんと僕のことを分かってくれていて、嬉しそうに僕の名前を呼んでくれます。いとこたちと一緒にいる時は、「展佑はどこ？」と探してくれます。

記憶力などは低下していますが、いつもニコニコしていて、穏やかに黙って座っていることも多く、一見すると全然病気ではないように思えるときもあります。しかし、病状は間違いなく少しずつ進行するようで、薬でそれを遅らせているというのが現状です。

現代の日本は、超少子高齢化社会であり、こうした高齢者の抱える社会的問題を、祖母の姿、そしてそれを介護する祖父の姿を通して実感します。

祖母は、週に何回か介護サービスを受けるようになりました。その時祖母は、「学校に行ってきます。」と言って出かけます。祖母は、介護施設を学校だと思っています。

また、外をフラフラと歩くことがありますが、その時は近所の方がちゃんと見ていてくださっています。

僕の家族に限らず、このような問題を抱えている人々は、今の日本社会の中に大変多くおられると思います。こうした課題を解決していくためにも、家族間の愛情・絆や、地域のコミュニティ、社会福祉制度の充実が不可欠であり、それらが一体となって高齢者やその家族を支える必要があると僕は考えます。

今僕ができることは多くはありませんが、祖父母が元気でいてくれるよう、会いに行けるときには顔を見せ、時々電話で声を聞かせてあげるなどして、少しでも祖父母の心の支えになりたいと思っています。

これからの日本に、高齢者の方々をはじめとする人々の笑顔が、ますます増えることを僕は強く望みます。

「僕にとっての地域の先生」

射水市立新湊中学校 三年 ふた二 くち〇 たか鷹 なり成

社会を明るくするために僕が一番重要だと思うことは「あいさつ」です。

僕は、毎朝登校中に会おう人達は何人もいます。その中には顔も知らない人やあいさつも交わさない人がたくさんいました。だから初めは道ですれ違うだけでした。でもある日、地域の人の方から僕に、

「おはよう」

と声をかけてくださって、僕も

「おはようございます。」

あいさつを返しました。初めはあいさつだけの日が長く続き何回も道で、すれ違いました。でも何回もすれ違いうちに自然と僕の方からあいさつができるようになり、

「おはようございます。」

とあいさつをすると地域の人も

「おはよう」

と笑顔で返してくださってとても心が温まりうれしかったです。

それから毎日あいさつを交わしていると、地域の人からあいさつ以外に一言、言葉をもらうことが多くなりました。「今日、寒いけど勉強がんばられ。」

「いつも、あいさつしてくれて、ばあちゃんうれしいわ。」

と言ってくれる地域の人が増え、僕自身、あいさつがたのしくなりました。

こういう関係が続いて、あいさつを交わしていくうちに、道に止まってまで話をしてくれる人も出てきて、その人

にはいろんなことを教えてもらいました。話をする時は相手の目を見て話を聞く。一人ひとりいいところがあるから自分自身に自信を持って前を見て歩くなど、社会人としてのルールを伝えてくださったたり、また、自分の昔話をしてくださる地域の人もたくさん増えました。その話の中には、戦争の話や自分の中学校、高校時代の話をしてくださる人もいました。だから、何もないときの登校時間は十五分ですが、地域の人と話していると三十分もかかります。でも、その三十分は、とても楽しく、充実した三十分でもあります。

僕にとって、たくさん話をしてくださったり教えてくださったりする地域の人は、地域社会の先生でもあります。あいさつは僕にとって何かと考えた時、見知らぬ人とコミュニケーションを取る一番簡単な手段だと思います。初めはまったく話もしなかったのに、あいさつを何回も繰り返すことで話ができるようになり、あいさつをした人もあいさつをされた人も心が温まります。

そしてあいさつをしていくうちに、人と人の輪、地域と地域の輪が広がります。さらに、地域の治安も守れると思います。まさに一石二鳥です。

僕には、これからもがんばっていききたいことがあります。

一つ目は、だれに対しても、ずっと一生あいさつを続けていくことです。

二つ目は、地域の方々を大切にしてあいさつの輪、人と人の輪、地域と地域の輪が一つでも広がるように努力することです。

みなさんも「あいさつ」を通して、明るい社会づくりを心がけてみませんか。

「命あることの尊さをかみしめて」

射水市立小杉中学校 三年 西^{にし}井^い乃々華^{ののか}

「生きていることは、当たり前のことではない。」私はつくづくそう思います。

今年の二月、私は平和学習の一環として、ある原爆体験者の方の話を聞きました。赤々と燃える町と空。むごい火傷やけを負い、うめき声を上げている人々、息絶えた人たちが道路にも川にもあふれ、まさに地獄絵図のようだったそうです。その方のお姉さんも友人も亡くなりました。

私は、このお話を聞くまでは、戦争について詳しくは知らず、知ろうともしていませんでした。戦争に負けたものの、日本は復興を遂げ、現在は世界でも有数の豊かな国となりました。そんな豊かさや平和の中で、私は、この幸せな日常が、過去の辛い思いをした人たちの上に成り立っているということを自覚しないまま、今まで生きていました。

そして三月。東日本大震災から三年が経ちました。平和の中で突然襲ってきた未曾有の天災。津波が一瞬にして、私のような中学生も赤ん坊も大人も、すべての平和な日常をさらっていきました。テレビでは、今も行方不明になった家族を探しておられる方の映像が流れています。あるお父さんは、潜水士の免許を取って海にいらっしゃるであろう奥さんを探しておられます。また、あるお母さんは、重機の免許を取って土を掘り返し、戻ってこない子供を探しておられました。……涙が止まりませんでした。

戦争にしろ、災害にしろ、何も悪いことをしていなくても、突然信じられないことが起こってしまう悲しい現実。でも、そんな悲惨な現実の中でも、生きていかねばならないのです。原爆体験者の方は、思い出したくもない体験を未来の平和のため、語り続けておられます。震災で行方不明になった家族を捜しておられる方も、不幸を嘆くばかり

ではなく、自分にできることは何かを考え、静かに、けれども力強く生きておられます。

一方、私たちの今の生活はどうでしょう。「ウザイ。」「死ね。」

私たちの身の回りには、このような言葉があふれています。いらだった自分の感情を抑えきれず、はき出された醜い言葉。また、

「めんどくさい。」

と、十分に学び、活動する環境があるにもかかわらず、物事を中途半端に投げ出してしまうこともしばしばです。

「死」の本当の意味も分からず、「命」あることの尊さも考えられない、幼稚で甘えた言動だったと、今は思います。「生命はすべて その中に欠如を抱き それを他者から満たしてもらおうのだ」

これは、最近勉強した詩の一節です。戦争や震災の過酷な現実を受け止め、懸命に生きておられる方々。その人たちの生きざまに胸打たれ、私は、本当に多くのことを学ぶことができました。まさに、一人前の人として成長するため、今の自分に欠けている考え方に気付かせていただきました。

平和に、心穏やかに生きられること、それは、決して当たり前のことではありません。

ですから、今の幸せに感謝しながら、精一杯生きていきたいと思えます。そして、苦しみの中でも、立ち止まることなく、どうにかして、一步でも前に進める努力ができる人間になりたいと思えます。

「困ったときはお互い様みんなで支え合う社会に」

射水市立大門中学校 二年 稲^{いな}垣^{がき}奈^な央^お

「困ったときはお互い様」

これは祖母がよく言う、私の大好きな言葉です。

私の家は両親ともに働いている核家族です。だから、私が幼い頃、病気で保育園や小学校を休まねばならない時は、祖母が高岡から大門までわざわざ自転車で家まで来てくれました。母は今でもその頃のことを思い出して、「どうしても仕事を休めない時は、おばあちゃんが来てくれて本当に助かった」と言います。

ある日、母は私に一通の手紙を見せてくれました。母がどうしても捨てられなかった手紙。そこには祖母が書いた文字が並んでいました。「なおちゃんへ、おばあちゃんかえります。おばあちゃんより」

祖母はぐっすり眠っている私を起こすのがかわいそうだと思い、手紙を書いて帰ったのだそうです。そして、母の手には、幼い字で「ありがとう」と書き添えられた私の絵もありました。母は祖母の優しさと娘の感謝の気持ちが嬉しくて、ずっと手紙を大切にしまっていたのです。

祖母がよく家に来てくれていたことは覚えていますが、実は、その手紙のことはあまりよく覚えていません。今では、もちろん一人で留守番もできるし、祖母に頼ることは随分少なくなりました。しかし、これまで祖母に何度も助けてもらったことや優しくしてもらったことは忘れません。そして、だんだん年を取って、もし祖母が自由に身体を動かせなくなった時は、私が恩返しをしたいと思います。

先日、ベビーシッターに預けた子供が亡くなったという悲しいニュースがテレビで放映されました。被害者の母親

は、子供を預ける施設が見つからなかったので、仕方なくインターネット上で見つけたベビーシッターに子供を預けたのです。お金儲けのためだけに、十分な施設や資格もなく、何もしないで預かった子供を放置していた結果、小さい尊い命が奪われてしまったのです。絶対にあってはならない悲しい事件です。それが現実起きてしまったのです。私には祖母がいます。だから母も安心して働くことができました。しかし、身近に助けてくれる親戚、頼れる友人がいなくて困っている人や十分に働くことができない人は世の中にたくさんいます。父が子供の頃、田植えや稲刈りなどの農作業が忙しい時季には、近所のお寺が託児所になり、子供たちを預かってくれたそうです。ところが今ではどうでしょう。大都市はもちろん、地方によっては、保育園が不足し、十分に働きながら子育てをする環境が整っていないことが大きな社会問題になっています。そう考えると、いかに私が恵まれた環境で育ててもらったかを改めて実感します。

「困ったときはお互い様」

私たちは毎日の生活の中で、本当に多くの方々に支えられています。地域や学校、友達同士が互いに助け合うことが普通の社会、支え合うことが当たり前の社会になるように、私たち一人一人が意識しなければなりません。そんな明るく住みよい社会になれば、だれもが子育てをしながら安心して働くこともできるし、今回のような悲しい事件も起こらないはずです。

今の私にできることは地域の行事にできるだけ積極的に参加し、私を支えてくださっている方々に感謝の気持ちを伝えて、つながりを大切にすることです。私も困っている人に手をさしのべることができる、頼られる社会の一員になれるよう努力したいと思います。

第64回 社会を明るくする運動
—作文・ポスター・標語—
第33回 中学生生活体験発表

平成26年12月

発行・編集

“社会を明るくする運動” 射水実施委員会
射水保護司会

主唱/法務省 ②

つぐなう、とは何か。
その間いと向きあいながら
ともに生きていく。
あやまちの「そのあと」にこそ。
社会の支えが必要です。



おかえり。

犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ

おかえり 更生保護

音楽

第
64
回

社会を明るくする運動